

言心先生の中国便り

百二十年後の反省

1894年は、中国とも日本とも干支で、甲午(きのえうま)年である。この年には、日清戦争が発生した。甲午年の為、中国の歴史本では日本と違い、甲午戦争という名が付けられている。

今年も甲午年で、ちょうど日清戦争が発生してから120年になる年である。日本の媒体、学界の沈黙とは対照的に、中国の媒体はこの自国の敗戦について多数の番組を作り、学界も色々な討論会を開いた。その中で影響が最も大きいのは、中国解放軍の大將の一人劉亜洲氏が甲午戦争について書いた文章である。この欄を利用して簡単に紹介しようと思う。

中国のアヘン戦争以後、中国と日本両国は共に改革開放の道に進んだが、なぜ西洋

列強と対峙していた隣国同士は早々衝突して、戦争という最悪な局面に突入したか。劉氏の観点では、朝鮮の農民暴動の派兵は、あくまで表の原因である。裏側の原因は、狭い東アジア地域に二つの国が同時に台頭するのは、無理だったということである。歴史の宿命とは、両国が激突して、二つは台頭し、もう二つは沈淪することである。筆者は劉氏の観点到大賛成である。現状は、百二十年前と変わらず、今の日中両国の尖閣諸島と靖国参拝等の紛争問題は、あくまで表の事で、裏側の原因は、百二十年前と同様、つまり同時に台頭できないという宿命だと思う。

日清戦争ではなぜ中国が、日本に敗れたか。劉氏が軍事的な要因より、制度的な要因が勝敗を決めたと言った。当時、日本が明治維新の成功で建てた君主立憲制という現代的な制度に対して、清国は封建・保守的な制度

で、尚且つ西太后と光緒帝の二重権力構造が存続し、負けたのは当然とも言える。黄海海戦の日中両国の海軍将校は、同じ西洋海軍学校の卒業生で、同じ英語で作戦を指令していたが、日本海軍は新しい意識を持つていた近代軍人の集団だったのに対し、清国海軍は古い意識を持った軍人の集まり、所謂農民海軍で、勝負は当然である。劉氏は、黄海海戦で、清国の北洋水師は全滅したが、日本海軍の軍艦は一隻も撃沈されなかったことに非常に驚いた。彼はそれを無数の卵と一個の石の対峙と比喩した。本当に見事な見識だと思う。

劉氏はまた当時の中国と

日本の社会内面を分析した。日本では自由民権運動のおかげで、人民は国民に脱皮し、全国民は戦争を応援し、沢山の若者が積極的に兵隊に参加した。一方、当時の清国では、国家が民を無視し、当然民も国家の事を重要視しなかった。彼は、民に平等に政治的な権利と富を与える事は現代国家の前提条件だと指摘した。残念な事に、劉氏の革新的な意見の実現は今の中国にも簡単ではなさそうである。しかし、劉氏の文章の中には中国と日中関係の未来に関する色々なヒントがあり、非常に読む価値があると思う。

甲午年

日清戦争が発生して120年

劉氏がいう「民に平等に政治的な権利と富を与えること」は今の中国でも簡単ではない…

